

大学生に性を語り始めて3年になる。今年から新たに津田塾大学での講義が加わった。そうしたら途端にマスコミの取材にとり巻かれることになった。

男性の私が女子大生にいったい性のなにを語るのか。大人である大学生、もちろんその中には性体験を持つ学生もあるだろうに、そんな学生たちに今さら性教育でもないではないか。マスコミの視線がほぼそんなところに向かっていてのを、私はいくつもの出版社の記者、それも男性の記者から共通に感じとった。

そうした質問にいちいち「性教育とはなにか」と説くのには、相当シンドイ思いをしたが、しかし、この人たちが世論をつくり出す仕事の一端をになっけいらっしやることを思い、できるだけ丁寧に対応をしたつもりである。

つまり彼ら(という言い方で男性記者を一括しておく)にとって、「性」とはいわゆる性行為を指すsexのことであり、したがって「to do」として性なのである。だから自分自身が性行為をするようになれば、学ぶことはなにもないし、あったとしても自分で経験して理解していけばいいということになるのである。

しかし、性教育の「性」とはsexualityのことである。sexualityとは生物としての性(sex)と社会的文化的性(gender)をあわせ含んだ、いわば「生と性」のことであり、彼らの意識にある「to do」と対比していえば「to be」、存在としての性、あり方としての性の学習なのである。女のあり方、男のあり方、そして女と男の

望ましい関係のあり方を学ぶことになるのである。そしてその学習の大前提は自らの性や異なった性に対する、誤解・偏見・思いこみから抜け出ることなのである。

こう考えれば性を学ぶのは子どもだけではない。性体験をしたあとでも、出産や中絶を体験したあとでも、つまり生涯、性を学び続けることによって真にヒューマンな関係、そして抑圧したり差別することのないエロスの関係が創造されるのではないか。

男性記者諸氏はこのような考え方は初めて耳にしたことだという。無理もない。彼ら自身、正面から性を学んだり考えたりする機会も全くなかったであろうから。女子学生もふくむ大学生諸君もまた、そういう視点で性を考えることなどなかったと、ほとんどが答えるのである。

これほどに性情報が氾濫する時勢に、「子どもたちや青年たちはもうなんでも知っているから教えることはない」という人がいる。いま私たちの周囲にある情報、あれが人間の性の事実だろうか、そしてあの渦の中に子どもや青年たちが巻きこまれるのを拱手傍観していて平気なのであろうか。

大学生になってからでも決して遅くはない。遅すぎるということはない。大学生諸君の反応から私はこう確信している。

それにしても性や男女のあり方が大いに揺らぐ時代を迎えたものである。揺らぐこと、変化することは不安を伴うが、それはまた同時に新しい時代の到来を告げるものでもあろう。